

永遠をつくり続ける

karinomaki

ダイヤモンド

この文章では、永遠とは何か、この世界から手がとどくものなのかを書いてみたいと思います。私は、永遠というものは何なのかを感じるために、物に永遠をこめようとしたことが何回もあります。しかし、それは無謀なことでした。なぜならば、永遠とはたえずつくり続けるものであるからです。物に永遠をこめるためには、いつも心を磨いて、物に吸収させるイメージを持つといいかもしれません。

例えば、それを持ってさえいれば永遠に生きられるという、ダイヤモンドがあるとします。ダイヤモンドは永遠の愛を示し、エンゲージリングによく使われていますよね。しかし、ダイヤモンドを持ってさえいれば永遠というわけではなく、人は日々の中から永遠にたえうる愛を築いていかなければなりません。

指輪は、それ自体に力があるわけではなく、人の思いを受けて永遠を示しているのです。

では、その思いとはどうやってつくっていくものなのでしょうか。

保留にすること

最近、永遠についてのカギを私は少し見つけた気がするのです。しかし、もちろん私が永遠を知っているわけではなく、あくまでもそのカギを少しつかんだ気がするだけです。そのカギは、人生のつらい問題を少しだけ保留にすることです。

もし、自分は何にでもしっかり向き合うことができると思えるならば、それはとても強いことです。しかし、本当は、自分は弱いと思っていることが大切だったりするのです。自分には解くことが難しい苦しみが存在することを知って、少し保留にして、苦しみと仲良くしながら、苦しいなりに楽しくすごすことが大切だったりするのです。

永遠の世界

ダイヤモンドの話に戻ります。永遠の意味を持つダイヤモンドを持っていることは、自分は何にでも向き合える、勝てると思うことです。しかし、それは人生の問題を上から下に見下ろしていることになります。上とは、永遠の世界、神の世界ですね。すでにダイヤモンドによって永遠が手に入っているのですから。しかし、永遠の世界、神の世界とは、果てしないものだと思われませんか？手に入れることができない・・・しかし、そこへ向かってのびていきたいと願うことしか、人はできないはずなのです。

のびていくこと、つくろうとし続けることが大切なのです。そのためには、苦しい課題と長いつきあいをする必要があります。つまり、上から下ではなく、下から上へ逃れるようにのびていく必要があるのです。そのためには、少し問題を保留にして、長い目で見ていく態度、そして、自分がすりへってしまうほどには向き合いすぎない力のぬき加減が大切です。もともと、神様は簡単に打破できる問題を、人に与えないはずだからです。問題を解くことを勉強させるための課題ですので、簡単であったら意味がありません。

階段の踊り場

ここで、私の経験を書きます。私は以前、苦しんでいる人に助言をしたことがあります。その人はとても苦しんでいました。私はその人が大切だったので、なんとか元気になってもらおうとして、一生懸命、永遠について考えて、その話をしてみました。

永遠を考えれば、この世界の苦しみは全て永遠の幸せへ向かうための通過地点なのだと。だから頑張ってもらいたいと言いました。しかし、それは、私が永遠の本当の意味をよくわかっていないための、稚拙なやり方でした。永遠は、苦しみや絶望を乗り越えて得るような、簡単なものではないのです。永遠は、この世界の苦しみを肯定し、自分の弱さを知ることで、心からわかるものなのです。なぜならば、苦しい、弱いということの後ろに永遠はかくれているからです。永遠は苦しみ、弱さと向き合い続けてわかるものであり、めざすものではないのです。めざすものであるなら、永遠はゴールであることになりませんが、永遠とは、ゴールのないことなのではないでしょうか。

苦しいから、弱いから、人は下からもがきながら上へのびていこうとする。そのことそのものが、永遠です。のび続けるから永遠がつくられるのです。しかし、苦しみは少し解けて、いつか苦の階段の踊り場に着きます。そして、もう上っていくのがいやになってしまいます。そして、そこは踊り場にすぎないのに、ゴールにしたくなってしまう。しかし、もしゴールを定めてしまうと、やはりそこから下を見下ろすことになります。そうすれば、そこで成長が止まり、永遠はいつしか朽ち果てます。

人は神にはなれない

人は、永遠の、神の世界で安住することはきっとないのです。上り続けることでこそ、永遠を得られるのです。もし、神の永遠の世界に着き、そこから下を見下ろすと、人はこれで自分は全てに勝つことができると思いあがってしまいます。そして、永遠の幸せを手にいれたと錯覚します。しかし、永遠は、手に入れるものではないのです。それは、人が決して神になれないことと同じことなのです。

木の永遠

私は、「永遠の幸せへ向かうための通過地点」と、苦しんでいる人に言いました。しかし、その人の心を助けることはできませんでした。では、どう言えばよかったのか、今ならわかるのです。苦しい課題があり、もがいていることそのものが、永遠の大切な種なのだと。永遠をめざして課題を乗り越えるのではなく、今まさに永遠の種を育てているのだと。永遠の種を育てるいちばんの方法は、苦しみと仲良くなり、苦しいけどまあいいやと思い、少し保留にして人生を楽しむ努力をすることです。永遠の種の木は、苦しみの地から、天へと逃れるようにのびて永遠をめざす。しかし、天の永遠をめざすというよりも、木の中にすでに永遠はあるのです。木は苦しみと戦ってのびているから永遠なのです。それなら、苦しくてもいいと思われませんか？無理をして打破しなくても、大丈夫。なぜなら、向き合い続けることの中に永遠はあるのだから。

心の中の永遠

永遠は心の中にあります。ハッピーエンドをめざしたり、何かを手に入れて満足しない態度こそが、すでに永遠なのですね。立ち向かう強い態度ももちろん大切ですが、弱さを知ることは、謙虚さをつくれます。謙虚だからのび続けよう、強くなろうと思うのです。自分の小ささを知っているからこそ、人は努力し続け、のびつづけることができます。つくっていく態度が、永遠につながるのですね。永遠はもうすでに私達の手の中にあります。苦しみとゆっくり戦いながらも人生を楽しむ努力をして、苦の階段の踊り場で一息つき、また上っていく。その、長い人生の旅が永遠に続くことを感じ、しんどいながらも上ることを楽しめれば、それが人生の本当の味なのでしょう。決して朽ち果てない永遠は、作り続ける態度の中にあるのです。

補足

ブログでも同じ内容について書きました。

karinomaki

永遠のつくりかた

<http://junsui87.blog.fc2.com/>